



取材日:平成25年8月9日(金)

取材先:NPO 法人 伊賀の伝丸(三重県伊賀市)

レポーター名:三重大学人文学部法律経済学科2年 狩野紗希

地域住民の架け橋へ 伊賀の伝丸

「うれしかったことを返していきたい」

三重県伊賀市にある「伊賀の伝丸」は、代表の和田京子さん、副代表の菊山順子さんの2人の思いによってつくられた。和田さんはジャカルタに3年半、菊山さんはパラグアイに2年、北中南米18カ国に9カ月滞在した経験がある。日本とは異なる文化や環境に触れ、大変さを実感するとともに、現地の人の優しさに助けられ、その国を好きになることができた。こうした経験をした2人が帰国すると、周りには外国人が増え、様々な問題があることに気づいた。「助けてもらってうれしかったことを返していきたい。」そうした思いによって、地域のための活動が始められた。

外国人と日本人をつなげる活動

伊賀の伝丸は、外国人と日本人の交流の機会を提供している。伊賀市の西部地区では、住民自治協議会と連携し、外国人に対するイメージについて人権アンケートをとり、それをもとにして、その地域の外国人と日本人が同じテーブルに座り話をする「テーブルトーク」を開催した。他にも、外国人と日本人両方が参加できるように、多言語で行われる防災シンポジウムを開催したり、町の有志で立ち上げた国際交流グループ「OTA ともだちの会」で地元の夏祭りに参加したりと、外国人と地域の日本人の交流の場をつくっているのだ。

和田さんによれば、三重県は外国人の集住率が全国第3位、三重県に住む外国人の国籍数は約100カ国になるそうだ。この数字を見ると、三重県に住む外国人が多く、それぞれの文化を持った人が多様に暮らしていることが分かるだろう。外国人と日本人がともに生活するなかで、外国人が困ることもあるが、日本人が困ることも同じようにあり、ぶつかり合ってしまう。地域の育成会に入っていた子どもの親が、1回は全員やらなければならない役員を十分にやってくれないということで、他の役員とトラブルになったことが筆者にも経験がある。しかし、お互いを理解しないで、いがみ合うことに、いいことは1つも無い。いがみ合うのではなく、お互いを理解しようと歩み寄り、協力し合える関係をつくる。こうした関係は、災害やその他協力しなければいけないことが起きたときを考えると、とても重要だ。伊賀の伝丸は、こうした「共生」の関係が

地域に広がることを目指している。外国人支援団体ではなく、外国人と日本人が「共に住み良いまちづくりをすること」を目的とした団体が、伊賀の伝丸なのだ。

伊賀の伝丸は、他にも VISA 申請や婚姻時に必要な書類など生活に必要なものを「日本語 外国語」または「外国語 日本語」に翻訳したり、医療機関や各種窓口、学校現場で通訳をしたりと、様々な形で外国人と日本人をつなげている。こうして、この団体のスタッフたちは日々活動しているのだ。「共に住み良いまちづくり」のために。

編集後記

私は外国人と交流する機会がほぼなく、外国人がどんなことで困っているのか考えたことがありませんでした。しかし、この取材で、病院で診察を受けるときや学校で三者面談をするときに、ちょっとしたニュアンスがわからないと誤解を招いてしまうことや、日本の学校の成績の付け方や進学のシステムなど日本の事情を知っていないと損をしてしまうことをお聞きして、そういうことで外国人は困るのかと学ぶことができました。他にも学ぶことがありましたが、何より印象に残ったのが、NPO 法人という組織運営を続ける理由でした。和田さんと菊山さんは、海外で外国語ができなくて苦しんでいたとき、周りの人に助けってもらって、その国を好きになることができたことから、同じように困っている人を助けることで、伊賀の町を好きになってもらいたい、私たちがうれしかったと思うことを返していきたいと話されていました。また、苦しんでいても必死に生きる人間のすばらしさに応えていきたい、少し手を差し伸べると解決していくおもしろさがあるからやめられないという思いも聞かせてもらって、NPO 法人という組織のイメージが変わりました。かわいそうだからという思いで運営しているのが NPO 法人なのだという考えが少しありましたが、和田さんと菊山さんのこうした話をお聞きして、そうではない、むしろそうした考えだけでは運営できるものではないというように感じました。そして、NPO 法人というものをもっと知りたいと思うきっかけになりました。次回の取材でも、機会があれば、NPO 法人とはどんなものなのか考えていきたいです。

伊賀の伝丸キャラクター つるちゃん

“おんがえし”が大好きな鶴「つるちゃん」。いろんな道具をかばんに入れて、あちらこちらを飛び回ります。

